

# III 馬と学習院とのかかわり 2

## 学習院馬術を支えた教官

旧制学習院の馬術教育を支えた教官たちのうち4名を紹介する。

学習院では正課の授業とそれ以外の時間に課外活動として志願者に馬術を学ばせていた。後者がのちに馬術部となる。馬術教官は授業と課外活動の両方に携わっていた。



大正 12 年卒業記念写真。右端が白極教官。  
背景の建物は、当時の図書館（現・史料館）

明治 22 年（1889）から同 27 年まで奉職した花嶋半一郎（1863～1894）は、明治 16 年にフランスへ留学しソミュール騎兵学校で馬術を学んだ、馬術界の草分け的存在である。明治 21 年に帰国後学習院に着任、陸軍騎兵大尉でもあった花嶋の馬術の授業は帶刀して馬を操るなど実戦を目的としたもので、軍人養成という学習院の教育理念にかなっていた。

明治 37 年に赴任した白極兵治（1878～1936）は宮内省主馬寮技手出身の教官である。白極は、打撃競技や撒紙競馬（野外に撒かれた紙を探しながら、正しい経路でゴールに至る時間を競う）を得意としていた。

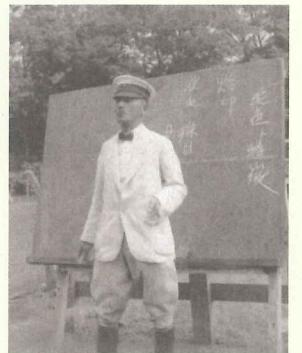


大正 15 年、全国高等学校対抗競技会優勝旗を囲んで。  
前列右が白極教官、左が山本教官。  
後方に打撃の撃門が設置されている

37 年間馬術教育に携わっており、馬の生態についても獣医以上の知識を持っていたと言われている。

白極と同時期に馬術を盛り立てたもう一人の教官が山本盛重（1882～1962）である。山本は海軍大臣などを務めた山本権兵衛の甥である。学習院初等学科を卒業し、陸軍幼年学校、同士官学校から騎兵連隊を経て、大正 10 年（1921）学習院馬術教官に着任した。学習院在職中の昭和 7 年（1932）、ロサンゼルスオリンピックに出場するなど馬術界に名を馳せた人物である。馬術教官としての山本は馬場や厩舎に黒板を持ち込み、乗馬人としての心構えや愛馬精神、馬術の基本動作などを図解入りで丁寧に教えるなど、学生にとって時間を忘れるほどの名講義であったという。騎乗の指導では、学生の名前は呼ばずに馬名で号令をかけ、馬も山本の号令にはとても従順だったという。「馬術は武道であり、馬が御せなければ人の上に立つ人間にはなれない」との持論を裏付けるエピソードである。

昭和 17 年、山本教官の授業風景



昭和 14 年、中等科 4 年生の馬場での練習風景

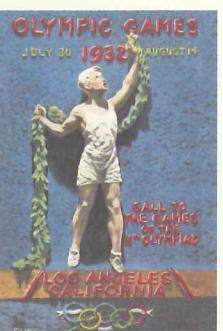
昭和 11 年（1936）に急逝した白極の後を継いだのが二村秀治（1892～1961）である。二村は騎兵学校を卒業後、宮内省主馬寮技手となり、「馬の殿下」の愛称をお持ちの三笠宮崇仁親王殿下の馬術稽古のお相手を務めている。第二次世界大戦中は厩舎を守り、銅葉の確保に奔走するなどの危機をのりこえ、学習院馬術の存続に力を尽くした功労者である。

## 第10回ロサンゼルスオリンピック (1932年7月30日～8月14日)と学習院



山本盛重旧蔵オリンピック紀念アルバム

第10回ロサンゼルス  
オリンピック公式ポスター  
(秩父宮記念スポーツ博物館蔵)



山本盛重には終生大切にしていたアルバムがある。茶色の合皮製表紙には、周囲に金の雷文様がめぐらされ、中央には騎乗の人物が金で型押しされている。表紙の右下に「昭和七年八月米国ロサンゼルスにて行はれしオリンピック馬術競技に参加せし時の紀念寫眞帖 山本盛重」と書かれた付箋が貼ってある。昭和 7 年のロサンゼルスオリンピックに、馬術の代表選手として出場した際の思い出の写真を納めたアルバムである。表紙の左上には同オリンピックの公式ポスターのデザインのスタンプシールが貼られている。

ロサンゼルスオリンピックが開催された昭和 7 年は、世界恐慌のあおりを受け、経済状況は悪化、満州事変の勃発や東北飢饉のため、国内も不安定で厳しい状況であった。当時、馬術ができたのは貴族か軍人が大半で、オリンピック各国出場者の多くは軍人であった。日本からの参加も監督の遊佐幸平以下全員陸軍騎兵学校の将校で、そのうち男爵の爵位をもつ西竹一（1902～1945）と山本は学習院初等学科出身者であった。

馬術競技はオリンピック最終日に行われた種目であった。山本は最年長の 50 歳で総合馬術（3 日間、同一人馬で馬場馬術、野外走行、障害飛越を行う。軍馬競技:ミリタリーとも称す）に登場して第 7 位に入賞。西は、大障害飛越（約 1km のコースに最高 1.6m 計 19 の障害を設け、技とタイムを競う）で堂々金メダルを獲得した。西の競技の後、場内に「バロン（Baron = 男爵）ニシ」の勝利を告げるアナウンスが流れると、8 万の観衆は嵐のような拍手を送ったという。西は初等学科時代に院長であった乃木希典に心酔して軍人への道へ進んでおり、馬術にのめりこんだのも乃木の影響が大きかったと考えられる。昭和 11 年（1936）の



ロサンゼルス入りした選手団。  
右より西、ひとり置いて、奈良太郎、遊佐幸平、  
吉田重友、山本、今村安（城戸俊三の撮影か）

第 11 回ベルリンオリンピックにも出場するが、第二次世界大戦中に硫黄島で戦死した。

西や山本ら馬術選手のロサンゼルスオリンピックでの活躍は、日本国民に驚きと感動を与えた。帰国後 9 月 8 日に行われた凱旋パレードでは、西を先頭に東京駅頭から二重橋前まで騎乗パレードを行っている。その後も歓迎ムードが続き、学習院馬術の名声を広く定着させるきっかけにもなった。



バロン西と愛馬ウラヌス号  
岡部長衡（1923～2001）である。岡部は文部大臣を務めた岡部長景の長男として生まれ、学習院初等学科から東京高等学校に進み、昭和 6 年のインターハイでは 2 位に入賞している。51 歳で出場したオリンピックでは、馬場馬術（常歩、速歩、駆歩）の 3 種の歩き方で停止、後退、旋回などの演技を競う）で個人 19 位、団体 6 位という成績をおさめた。長衡の息子長忠（昭和 40 年卒）は父の馬への情熱を継承して学習院大学馬術部に所属、その後馬術部監督にも就任した。学習院馬術のサポーターのひとりである。（学芸員 富田ゆり）



昭和 7 年 9 月 7 日、帰国直後の凱旋パレード（東京駅前）。  
日章旗を手に騎乗する西ら選手団一行

